

時潮の流転

(昭和十四年寮歌)

望月真三君 作歌
竹村伸一君 作曲

一

時潮じちようの流転ながれそうと
四季とき乾坤けんこんに巡りめぐ立つ
去来きよらい常じょうなく人ひと変りかわ
有情うじよう無為むゐの時鐘かねの音ねに
孤城こじやうの爽春はるは未だまだ浅しあさ

二

遠くとほ流離りうりの春はるにきて
此この高樓たかのうに春愁うれひつつ
郭公かつこう鳥とりの鳴くなさへも
多感たかんの児等こらの情懷むね熱くあつ
懷古かいこの涙なみだ溢るあふべし

三

真日まひ澄むす北きたの蒼穹そうきうはるか
飛燕ひえんひとたび音おとに鳴けなば
桃李とうりの華影かかげは瘦やせゆきて
あはれ旅寝たびねの若きわか遊子ごよ
帰南きなんの郷愁おもひしきりなり

四

夕陽せきやう西にしに落ちお行けゆば
白樺しらば林はやし朱しに染み
暮秋ぼしゅうの颯かぜは飄々ひょうひょうと
時艱じかんを憂うれふ国くにの子この
悲腸ひちやうの声こゑに似にたるかな

五

北斗ほくと地平ちへいに揺曳ゆゑぐとき
天地てんちの四大しだい霜しもと凝りこ
四寮しりようの高夢ゆめも凍いてつきて
ほがらほがらの朝あさぼらけ
帰雁きがんの孤影かげよ月つきに飛ぶと

六

明日あす別れわか行く旅人たびびとの
春はるの夕べゆうの宴遊うたげかな
かへらぬ絢夢ゆめをしのびつつ
生命いのちの故郷さとと慨嘆なげきしも
すでに三星みとせ霜せの草枕くさまくら